

農と暮らしの新たな視点を探る

# 産直コペル

sanchoku coper

2015.7  
Vol.12

定価 680円

# 感謝

政 芳賀鮮魚店

種を受け継ぎ今に伝わる  
伝統野菜木田ちこそ  
(福井県福井市)

特集 震災からの復興

長野県白馬村・小谷村

岩手県大槌町

「ど真ん中・おおつち協同組合」

大津波のあとも変わらず恵みを届けてくれる

# 漁の新東

うみのやんこく

400年の伝統と技術は地域の宝物

岩手県大槌町 ど真ん中・おおつち協同組合

東日本大震災から4年余が経過。大きな被害を受けた東北各県では復興事業が進められているが、まだ多くの方が仮設住宅で生活しているように、復興への道のりはまだまだ遠い印象だ。

今日のこと、明日のことを考えるのが精一杯だった震災直後。それでも地域の未来を憂い、手に手を取り合って未来を向いて歩み続けている水産加工業4社が岩手県大槌町にある。共同で設立した「ど真ん中・おおつち協同組合」だ。本来であればライバル関係にあったはずだが、地域に対する想いが4社を引き寄せた。震災から4年経った今年3月に新社屋が完成。ここを拠点に各社が積み上げてきたノウハウを駆使し、加工品を開発、ネット販売を展開するなど、大槌の海産物の魅力を全国に発信する。

(文 & 写真・岡田安弘、写真・鹿野なつ樹)

今も被災地の姿をとどめている旧大槌町役場



海岸を走る三陸沿岸道路。復興に向かう大型車両が行き交う



旧役場庁舎そばのプレハブ商店街



## 【海約】の東 海産物加工は 400年の歴史と伝統

大槌町は岩手県東部に位置し、江戸初期に考案した新巻鮭を江戸に出荷したことで栄えて以来、鮭は町を代表する産物になった。このほかウニやイカ、サンマ、カキなどの海産物の水揚げも豊富で、同県沿岸部の地域では水産業に占める水産加工業の雇用者数は30%なのに対し、大槌町では約50%を占め、まさに水産加工で成り立ってきた町。

ところが、2011（平成23）年3月11日の東日本大震災では、地震に伴う大津波と火災で、事業所や住

宅などあらゆるものが破壊され、町民は生活基盤を一瞬で失った。町の

経済活動と雇用環境に大きな影響を与え、水産業の早期再建が、町全体の復興にとって最重要課題というべきことは、町当局や事業主は当然認識していた。

しかし、震災による死者・行方不明者は当時の人口の7・8%にあたる1284人に上り、建物も半数以上が全半壊した。水産業関連では全漁船の75%にあたる600隻が流出。18あった水産加工の事業所もすべて全壊した。他地域から進出していた水産加工会社は相次いで撤退し、地元漁協は経営破綻した。

## 【海約】の東 水産業の復興なくして 大槌の復興は成し得ない

そんな中、震災で工場店舗が全壊した町内で水産加工業を営む4社（芳賀鮮魚店、浦田商店、小豆嶋漁協、ナカシヨク）が町の水産業を復活させようと震災から間もない2011年の8月に任意団体を立ち上げた。

芳賀鮮魚店の芳賀政和店主、浦田商店の浦田克利社長、小豆嶋漁協の小豆嶋敏明社長、ナカシヨクの齊藤勲社長が最初に出会ったのは、震災から2カ月後の5月15日。町役場で開かれた被災者説明会だった。この時、芳賀さんが「このままだと水産

業が全滅だね」とつぶやいたという。

水産業で生きてきた町だからこそ、これからも水産業を。4人の意思是固まったものの、震災直後ということもあり各社ともに資金難に陥っていた。ところが、全国に向けて、「やる気とノウハウはあります。資金はありません」と呼び掛けたところ、各地からサポーターに名乗りを上げる人が続々と現れ（※1）、仮設工場への入居や自社工場の再建が叶い、事業再開にこぎつけることができた。

翌2012年3月には結束をより強める、組合組織「ど真ん中・おおつち協同組合」を設立させた。海の幸のブランド化や販路を全国に拡げる目的で、4社が連携して事業にあたる。各社がこれまで培ってきたノウハウを結集し、高付加価値商品の開発・販売など、積極的な共同事業を展開し、町の復興に一役買う。これが設立趣旨だ。各社の水産加工業は継続しながら、これまでにネット販売のほか、4929人にまで増えた全国のサポーターに商品案内をしたり、町に実際に来てもらうイベントなども開催した。

一方で、事務所はずっと仮住まい。組合を組織する事業者の加工場や事務所の一部などを転々とした。



ど真ん中・おおつち協同組合の新社屋



大槌湾にある大槌魚市場



サケの加工施設で働く従業員



新社屋では地元産の加工品が販売されている



## の東 海約

### 組合施設が完成

震災から4年が経過した今年3月、待ちに待った組合の新社屋が完成した。魚市場を目の前に見据える立地は、まさに大槌復興の拠点としてふさわしい。震災前は人々の憩いの場である公園だった場所だという。3月21日に行われた落成式とオープニングイベントには町民や関係者ら約500人が参加。地域住民の期待の大きさが窺えた。

新社屋は事務所機能だけでなく、商品の共同開発施設も兼ねている。木造平屋で約100平方メートル。同組合が掲げる町の水産業の復活への取組み「ど真ん中・おおつち!ひよ

うたん島GO・GOプロジェクト」に賛同したキリンググループが、「復興応援 キリン絆プロジェクト」(※2)の一環で3600万円を支援し、そのうちの2800万円建てた。内部は事務所のほか、加工品などが並ぶ物販スペース、観光客や町民の交流の場となる商品開発兼交流スペースもあり、随時イベントを企画し、開く予定でいる。開発が進められている商品には、大槌特産のサケを使ったサケソーセージがある。組合によると、今年中の商品化を目指しているという。

## の東 海約

### 4氏が語る当時と今

芳賀政和さん(芳賀鮮魚店)  
●4人の出会いは運命的

組合理事長を務める。「我が家は代々漁師の家系。タクシーの運転手などした時期もあったが、魚の仕事が好きだったので、三陸の魚を扱う鮮魚販売、移動販売の仕事を妻と2人で始めました。震災直後はどうしたらいいかわからない状況だったが、支援金で翌年3月にプレハブの店を開店させることができました。組合としては、みんな屋根も水もない状況だったので、魚市場の一角を借りて商売した。「4人が集まっ

たのは運命的というか、自然と輪が出来ていた。さらに、ボランティアやスタッフの人がどんどん入ってきて輪がみるみる大きくなった。我々だけでやっていても、ど真ん中がここまで大きくなることはなかっただろう。本当にありがたかった。ただ、大きくなってきたからこそ、これからの行動に責任を感じるね」。

小豆嶋敏明さん(小豆嶋漁業)  
●水産加工品で町を元気に

サケやマス、イカの漁獲が減ったと思えば、追い討ちをかけるように発生した大震災。「赤字ばかり膨れ上がった。もう加工はやりたくない」と、ハローワークに走ったこともあ



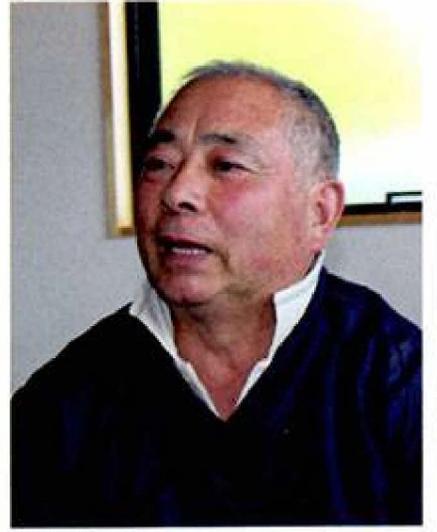
浦田克利さん



小豆嶋敏明さん



齋藤勲さん



芳賀政和さん

りました」と打ち明ける。「でも自分は加工ばかりしていたので他に仕事になかった。そんな時に、3人と出会い、補助金で事業を動かせることを知り、これはやるしかないと思った」と振り返る。

今は加工一本で勝負している小豆嶋さん。品数はおよそ20品目あるが、ほとんどが震災後に考案したものだ。

昨年11月に東京の築地市場で開催された「Fish—1グランプリ2014 in 築地市場まつり国産魚ファストフィッシュ商品コンテスト」では、出品した「鮭つみれ」が大日本水産会会長賞を受賞し、大槌のサケをPRすることに成功した。

また、今年4月には「サケのウイナー」を発売。「サケだけでは淡白過ぎるので味のバランスを工夫した」とのこと。鮭つみれに続くヒットを予感させる。

#### 浦田克利さん（浦田商店）

##### ● 寿司ネタ再開が自分にとっての復興

「復興を考えれば自分のことより地元の復旧を優先したかった」。常に地元産業の発展を気にかけていた浦田さん。

水産業に身を置いたのは21歳のとき。先代からの家業を引き継ぐ形

だった。ところが東京での修行時代に、機械のように美しく魚をさばく切り身職人に出会ったのがきっかけで、切り身専門に転身した。

震災ではすべてが流され、3人と知り合った場面では「どうにかしないといけないねと話したものの、そうはいっても実際にどういう方向に動いていいかわからなかった。何も無くなった中、途方に暮れていたところ、全国からの支援がとても大きな励みになった」と話す。その後は手作業の技術を求める業者からの仕事が増えた。加工場の規模は以前と比べ小さくなったが、売り上げは震災前の水準にまで戻った。「正直ここまで立ち直るとは思ってもみなかった。全国からの支援、従業員、家族の支えがあったからこそ」。

震災前は寿司ネタを扱っていたが、現在仮設の加工所ということもあり、衛生面を考慮して断念している状況という。「（寿司ネタ）再開が僕にとっての復興の節目になる」と手に力を込める。

#### 齋藤勲さん（ナカシヨク）

##### ● 人材の流出は深刻

イカの唐揚げやサバ、サンマの竜田揚げなどを製造、販売する水産加工会社。大手スーパーなどに商品を

納入している。

震災時の津波で、所有していた3つの工場は全壊。補助金を活用して再建したものの、規模は震災前の半分程度になった。「この先どうなるのか、借金だけ抱えてやっていけるのかと自問自答したが、やるしかないと自分で自分を追い込んで、なりふり構わず前に進む決心をした」と当時を振り返る。

従業員は震災前と比べて3人増えて44人だが、うち外国人研修生を7人雇い、震災後の人材の流出を賄っているのが現状だ。以前は三陸産にこだわっていたが、漁師も減り水産物の水揚げが落ち込んだ影響から、今では地元産にこだわっていない。こだわらなければ従業員を雇い続けることができないからだ。従業員を思い、会社を思い走り続けている齋藤さん。売り上げは震災から3年目で、震災前のレベルまで持ち直した。「今後は再び三陸産にこだわりたい」と意気込む。「三陸産定置網で獲れた大槌のイカは最高。旗振り役となって全国にPRしたい」と目を輝かせる。

#### 海の東

##### 組合と大槌のこれから

「（新社屋は）津波が来たところに建てて大丈夫かと思ったが、海の見



大槌湾に浮かぶ蓬莱島。通称「ひょっこりひょうたん島」



水揚げされたばかりの様々な種類の魚

えるところ、訪れた人が新鮮な食材で食事が取れるところという意味では、ここが適地だと思った」（芳賀さん）。「町の水産の拠り所に。観光の中継点になれば自然と賑わいにつながるはず」（浦田さん）。「新商品をここで売りたい。子どもから大人まで楽しめる施設になれば」（小豆嶋さん）。「イオンのネットショップピングにも掲載したが、正直もつと反響があると思った。世の中の意識として復興はもう終わっている、風化しているのかなと感じた。我々は、町をもつと宣伝できるような施設に育てていかねばならない使命を感じている」（齊藤さん）。

あと2年くらいをかけて衛生面の整備を進め、加工体験ができるようにする計画もある。

### 海の東 組合のロゴは港に浮かぶ島をデザイン

港に浮かぶ島の名は「蓬莱島」。NHKで放送された人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモチーフになった島として有名で、大槌町のシンボル。ロゴは島と太陽をデザインし、真つ赤な太陽の中心に「海の約束」の文字を入れた。

一時は津波で何もかも流されてしまったが、「魚も牡蠣もイカも帰ってきてくれた」。これを「海の約束」

### ■地元銀行・企業も復興を後押し

今回の取材をセッティングしてくれたのは岩手銀行（本社・盛岡市）と寺岡精工の部品加工・組立部品を担う精密機器メーカー、デジアイズ（本社・奥州市）。

岩手銀行は震災発生後から、地域と一体となった復興を目指すため「いわぎん震災復興プラン」を推進。平成25年4月からは、地域の復興を強力に支援することに加え、次世代を支える新たな産業の育成・振興に注力することで、地域経済の復興・発展に積極的に取り組むことを基本とした新中期経営計画「いわぎんフロンティアプラン～復興と創造、豊かな未来へ」をスタートした。地域のリーディングバンクとして復興需要への対応・産業復興支援・インフラ整備支援などに積極的に取り組んでいる。

デジアイズは、組立専門工場として操業後は、POSや電子計量器、浄水器、生ごみ処理機などを製造している。2009年からは生ごみ処理機を販売している企業の責任として、ごみの扱いに知恵を絞り、乾燥したごみを畑の肥料として再利用する循環型農業に着手するなど、農業の6次産業化にも熱心な取り組みをみせる。また、三陸の幸を使った地域交流や水沢商業高校との連携など地域貢献活動にも熱心。

組合を組織する会社では、寺岡製のラベルプリンタ、児童計量包装値付機など使用している。

今後両者は、岩手の物産を全国でPRするイベントなどを計画する予定という。

と表現。芳賀さんは「これこそ大槌の魅力であり、自慢できるもの。私たちのロゴにふさわしい」と話す。

組合名「ど真ん中・おおつち」は、大槌町が三陸海岸のほぼ中央にあることから命名した。

### 海の東 4年経過も 仮設暮らしは8万人

東日本大震災による死者は3月10日現在で全国で1万5891人に上る。被災の大きかった宮城県が9539人、岩手県が4673人、福島県が1612人。行方不明者は2584人いる。全国の避難者数は2月時点で約22万9千人で、震災から4

年経てもプレハブの仮設住宅で暮らす避難者は岩手、宮城、福島の3県で8万人以上に上る。

4月1日現在の 大槌町の人的被災状況。死亡届受理数1232人（身元判明者808人、行方不明者数424人）、死亡届未受理の行方不明者数2人、震災関連死51人（町民課）となっている。

※1 101万円で寄付を募り、お礼に海産物を送るサポート制度。全国約5千人から9千万円余りが寄せられた。  
 ※2 食に携わる企業として「地域食産業の復興」に貢献したいとの思いから、生産から食卓までの支援をテーマにした水産業に対する支援活動を3年間にわたって継続的に実施し、東日本大震災で被災した地域における水産業の復興を目的とする。公益財団法人日本財団が事業選考委員会を組織し、資金管理と支援先・支援金額を決定する。対象地域は岩手県、宮城県、福島県。総額4億円。



# 俺たちの絆

「大槌の未来のために」



ど真ん中・おおつち協同組合

〒028-1105 岩手県上閉伊  
郡大槌町安渡3丁目522

電話0193-42-5039

FAX0193-42-5031

メール info@otsuchi.jp

